

<b>Title</b>	巻頭言 自己同一性の隘路（アポリア）：自律から他律へ
<b>Author(s)</b>	土方, 透
<b>Citation</b>	聖学院大学総合研究所 Newsletter, Vol.20-4 : 1
<b>URL</b>	<a href="http://serve.seigakuin-univ.ac.jp/reps/modules/xoonips/detail.php?item_id=2673">http://serve.seigakuin-univ.ac.jp/reps/modules/xoonips/detail.php?item_id=2673</a>
<b>Rights</b>	

聖学院学術情報発信システム : SERVE

SEigakuin Repository for academic archiVE

---

---

## 巻頭言

# 自己同一性の隘路<sup>アポリア</sup> ——自律から他律へ——

近代は、デカルトから始まると言われる。デカルトは、すべての知識の确实性を最終的に保証する原点、すなわち「究極的な确实性」を求め、「なくてはならないただ一つのこと (unum necessarium)」を探究した。そこで得たものが、「疑っている自己の存在の确实性」であり、そこから直証的な确实性をもつ哲学の「第一原理」として、有名な「われ思う、ゆえにわれ在り (cogito ergo sum)」を導き出した。「近代的自我論」「自己同一性の議論」の始まりである。

ところで、自分が自分であるということを《わたし》はどう認識するのであろうか。自己が、自己について、他者のけっしてもつことのない特徴をいかに数多く述べようとも、それは自己の必要条件にしかすぎない。その特徴を自己以外の他者が持ちえていないという確証は得られない。結局、自己の確認は、「他人でないところのもの」というのがせいぜいである。では「他人」とはなにか。この問いについても、答えは同様である。その「他人」からみた「他人」ではないところのものである、としかいいようがない。つまり、《わたし》が何であるか、誰であれ《わたし》において決定することはできない。

さらに言うと、わたしの身体的特徴を《わたし》は、どうやって知るのだろうか。たとえば、鏡の前の自分の姿を他ならぬ自分の姿だということを、《わたし》はどうやって知るのだろうか。その場合、《わたし》は、他人の姿をこの眼で確認し、その姿が鏡のなかで（逆象であれ）実際の他人の姿と同様なものであることを知る。この鏡の機能を知った《わたし》は、その知識を自分の鏡像にも応用し、自分の姿をかくかくしかじかのもので推定することになる。ここで自己の像の确实性は、他人の像の确实性から類推されるものにすぎない。つまり、より不确实な現象である。したがって確認する自己にとって、確認された自己は、他者よりも遠い存在といえる。

このように考えると、デカルトを出発点とする近代的自我の确实性の議論が、その根本において危うくなっていることが示唆される。すなわち、自己は他者から規定し直さなくてはならないのではないだろうか。かつてヘーゲルは自律的個人を想定し、そのうえで「最高の共同は、最高の自由である」と記した。しかし、現代社会における異文化との出会い、価値の多元化は、自己の同一性よりも、他者の圧倒的な存在を感じさせる事態である。そろそろコペルニクスの転回をはかる時機にあるかもしれない。すなわち、「自律」は「他律」に基づく。この変更を基底に、自由や平等、あるいは主体、人権、尊厳など、自律的個人に備わるものとして、これまで金科玉条のごとく前提とされ、天賦のものとして用い続けられてきた諸概念が、再定式化されるべきであろう。